

# ルイ・ル・ロワ

## 『世界における事物の変転と多様について』論

志々見 剛

ルイ・ル・ロワ (ca. 1510-1577) は十六世紀フランスのユマニストである。その活動範囲はギリシャ作品の翻訳、政治文書、歴史論、弁論と多岐にわたっている。最晩年に書かれた代表作『世界における事物の変転と多様について<sup>1)</sup>』(1575)は、彼の業績の集大成であるだけでなく、同時代、さらには後世に大きな影響を与えた。

彼は、フランソワ一世治下の人文主義者たちから、ギリシャの文化・言語・歴史への強い関心を、そして、古典の翻訳を通じて俗語たるフランス語の「擁護と顕揚」を図ろうとする志を受け継いだ<sup>2)</sup>。その一方、ローマ法研究によって培われた文献学的方法、そして現実の政治的・社会的状況に対する危機意識においては、十六世紀後半の一群の「法曹家知識人」の最初の世代に属する<sup>3)</sup>。彼らの場合と同様、ル・ロワにおいても歴史、とりわけ、世界の時間的・

---

<sup>1)</sup> *De la vicissitude et de la variété des choses en l'univers, et concurrence des armes et des lettres par les premières et plus illustres nations du monde, depuis le temps où a commencé la civilité, & memoire humaine jusques à present. Plus s'il est vray ne se dire rien qui n'ait dict paravant : & qu'il convient par propres inventions augmenter la doctrine des anciens, sans s'arrester seulement aux versions, expositions, corrections & abrezes de leurs escrits.*, Paris, Pierre L'Huilier, 1575, avec privilège du roi. ここでは、初版の翻刻である *De la vicissitude et de la variété des choses en l'univers*, éd. Philippe Desan, « Corpus des œuvres de philosophie en langue française », n° 40, Paris, Fayard, 1988 を参照とする。以下、ページ数のみを示す場合はすべてこの版からの引用である。

<sup>2)</sup> フランスにおけるギリシャ学の発展については、Emile Egger, *L'Hellénisme en France : leçons sur l'influence des études grecques dans le développement de la langue et de la littérature françaises*, Paris, Didier, 1869, 2 vol. ; David O. McNeil, *Guillaume Budé and humanism in the reign of Francis I*, « Travaux d'humanisme et Renaissance », n° 142, Genève, Droz, 1975 参照。こうしたギリシャへの関心は、後のアンリ・エチエンヌなどに顕著に見られるように、一面においては、ローマの文化的・政治的さらには宗教的な後継を自任するイタリアへの対抗意識の表れでもあった。

<sup>3)</sup> George Huppert, *The Idea of Perfect History : Historical erudition and historical philosophy in Renaissance France*, University of Illinois Press, 1970 ; Donald R. Kelley, *Foundations of Modern Historical Scholarship : Language, Law, and History in the French Renaissance*, Columbia University Press, 1970 参照。

地理的な広がり全体の全体を包含する「全体史 *histoire universelle*」に関する考察が重要な位地を占める<sup>4</sup>。そこでは、新大陸やトルコ・イスラム世界、インド、中国（シナ・カタイ）の異質な習俗に対する関心が、東方の古代文明、ギリシャ・ローマ、さらには中世から現代をも含む過去に対する関心と軌を一にしているのである。アトキンソンの言うように、ル・ロワにおいては、人文主義的な古典の教養と新たに発見された地域や民族に関する新知識が結びついている<sup>5</sup>。そして、こうした「歴史」の全体に対する関心は、現代および自己を世界全体の中にどのように位置づけ、また意味づけるか、という問題意識に端を発している。

## 1. ルイ・ル・ロワの生涯と作品

### A. 生涯と作品<sup>6</sup>

ルイ・ル・ロワは1510年頃、ノルマンディー地方のクタンヌ Coutances に生まれた。富裕な家の出ではなかったが、同地の司教フィリップ・ド・コセ Philippe de Cossé に才を認められて若くしてパリに遊学し、設立されたばかりのコレージュ・ロワヤルにてラテン語とギリシャ語を学ぶ。1535年にはトゥールーズに赴き法学を修めている。

<sup>4</sup> 「全体史 *historia universalis/communis*」は、個別の都市、民族、人物あるいは特定の時代や出来事を扱った「個別史 *historia propria*」に対置される。具体的には、ボダンの『歴史を容易に読むための方法 *Methodus ad facilem historiarum cognitionem*』（1566初版）、ラ・ポプリコエの『歴史の歴史 *L'Histoire des histoires*』三部作（1599）などを参照。これらは主としてポリュビウスやシチリアのディオドロスといった、ローマ期のギリシャ歴史家の著作を範としている。彼らにおける「全体史 *κοινή ιστορία*」の理論上・方法上の概要は Polybe, I, 1-4 ; Diodore de Sicile, I, 1-4 を参照。なお、キリスト教的な文脈での「普遍史 *histoire universelle*」は、天地創造から最後の審判に至る人間世界の直線的な展開を、神の摂理や、その地上の代表者たる教会の発展との関係で論じるもので、ここでの「全体史」とはまったく異質なものである。また、アグリッパ・ドービニユの場合は、フランスを中心とした宗教戦争の歴史に「普遍史」と冠する、特殊な例である。

<sup>5</sup> Geoffroy Atkinson, *Les Nouveaux horizons de la Renaissance française*, Genève, Droz, 1935 ; Slatkine Reprints, 1969, p. 23.

<sup>6</sup> ル・ロワの人物と業績については、古典的な著作である A.-Henri Becker, *Un Humaniste au XVI<sup>e</sup> siècle. Loys Le Roy (Ludovicus Regius) de Coutances*, Paris, Lecène, Oudin et Cie, 1896 ; Genève, Slatkine Reprints, 1969 及び Werner L. Gundersheimer, *The Life and works of Louis Le Roy*, « Travaux d'humanisme et Renaissance », n° 82, Genève, Droz, 1966 に詳しい。Michel Simonin (dir.), *Dictionnaire des Lettres françaises : Le XVI<sup>e</sup> siècle*, « Le Pochothèque », Paris, Fayard, 2001 の« Le Roy (Loys) » (Philippe Desan) の項も参照。

1540年、パリに戻る。爾来、フランソワ一世以下四代の王に仕え、宮廷に従って各地を転々とした。この間、イギリスに赴いてエドワード四世の知遇も得ている。ただ、理財の道には暗かったゆえ、絶えず困苦に苛まれ、パトロンを探すのに心を労さねばならなかった。貧困こそは「彼の人生の分かちえない——おそらく唯一の——伴侶<sup>7</sup>」だったのである。

彼が初めて文名を顕したのは、パリに戻って間もなく、ビュデの死を機に物した『ギョーム・ビュデ伝』(1540)においてであった<sup>8</sup>。この作品は、ビュデ個人に限らず、ビュデに代表されるフランソワ一世治下のフランスの文芸復興の栄光を活写し称揚するものである。

それ以降は、ギリシャの古典をフランスに根付かせることを自らの主な使命とし、プラトン<sup>9</sup>、イソクラテス<sup>10</sup>、デモステネス<sup>11</sup>、クセノフォン<sup>12</sup>の仏語訳を次々と世に問うた。彼は、プレイヤード派の運動と並行して、少数の学究にとどまらぬ貴族や市民の広い階層を相手とし、翻訳を通じて俗語たるフランス語を文学的・思想的な表現に堪えるものへと錬磨することを望んだのである。これについては彼自身、相当の自負もあった。先回りして『変転と多様』を引けば、彼は第二章で、異端を助長しかねないとして当時しばしば否定的に扱われていた聖書の俗語訳も含め、翻訳が知識の伝播に大いに裨益する点を強調している。それが「立派というよりも骨が折れる」(p. 98)仕事である上、原語の文体の優雅さや固有の制度・風習、あるいは比喩表現などを完璧には移しえないという言語的・表現的な限界を持つことは無視できないが、それは翻訳の必要性・重要性を否定することにはならない。

しかし、もし人がこれ【翻訳】を、諸言語に無知な人々を助けるため、あるいは自分自身の研究のため、すなわち文体を錬磨し、優れた著作家についての判

<sup>7</sup> Becker, *ibid.*, p. 1.

<sup>8</sup> *Guglielmi Budae viri clarissimi vita per Ludovicum Regium*, Paris, J. Roigny, 1540. この中でル・ロワの行ったビュデの文体に関する批評の修辞学史上の意義については、Marc Fumaroli, *L'Âge de l'éloquence : rhétorique et « res literaria » de la Renaissance au seuil de l'époque classique*, 3<sup>e</sup> éd., Genève, Droz, 2009, pp. 447-450 参照。

<sup>9</sup> 『ティマイオス』(1551)、『パイドン』(1553)、『国家』(一・二巻のみ 1555、死後全巻刊行)、『饗宴』(1558)。これらの翻訳については、J.-C. Margolin, « Le Roy, traducteur de Platon et la Pléiade », *Lumières de la Pléiade*, Paris, J. Vrin, 1966, pp. 49-62 ; J.-Y. Pouilloux, « Problème de traduction : Le Roy et X<sup>e</sup> livre de la République », *BHR*, XXXI, 1969, pp. 47-66 参照。

<sup>10</sup> 『イソクラテス弁論三書』(1551)。

<sup>11</sup> 『オリュントス情勢』(1551)、『ピリッポス弾劾』(1555)。

<sup>12</sup> 『キュロペディア』(部分訳、1553)。

断を整えるために行うのであれば——これはキケロさえもが行ったことであり、私も彼の模範と督励に従って、特に敬われている古代作家たちの優れた点を現代の風俗や事柄に合わせつつ、これを試みた——私は翻訳するということをとても立派なことと考える。知性や知識の凡庸さゆえ、私がしたのは単にフランスの民族に最初に学芸の光を——すなわちイソクラテス、クセノフォン、デモステネス、アリストテレス、プラトンといった、セネカが人類の師と呼んだ人々であるが、彼らは長い間、学校の中に隠され、図書館の中に埋もれ、誰も用いることがないままであった——示しただけだったとしても、私は、いまだ学芸のためには整えられも慣らされもしていない言語を用いて仕事をしているのであるから、決して斥けられるべきではないだろう。この言語は、それを用いて仕事をしていくうちに、大いに改良されていくことだろう。ちょうどギリシャ語やラテン語が、優れた事柄を扱うことで、少しずつその完成へと至ったように。哲学、政治学、戦争の事跡や、その他の有用で高潔な学芸をである。それは、空想の物語や恋愛詩、その他の戯言が書かれることによってではなかった。俗語の方は、こうしたもので満ち溢れているのだが。(pp. 99-100)

彼はまた、第十章でペトラルカ以降の時代の文芸・軍事の隆盛を語る中でも、翻訳家の一人として自分の名前と業績を引いている (p. 373)。実際、プラトンの翻訳は特に名高く、親交のあった詩人のデュ・ベレーは彼を「我々のフランスのプラトン *notre Platon françois*」と称えている<sup>13</sup>。

プラトンの哲学的対話篇を除くと、ル・ロワの関心は主として政治学にあった。上に挙げたアテナイの弁論家の作品に加え、1568年にはアリストテレスの『政治学』の翻訳・註解を刊行している。これは彼の長年の翻訳業の総決算であったが、それ以上に、その註釈は古代の政治論の総覧として大きな意味を持った。これはやがて宗教戦争の激化する中、政治宣伝の弾薬庫として用いられることになる<sup>14</sup>。

60年代に入ると、政治論・歴史論を発表するようになる<sup>15</sup>。彼は政治的には、フランス国家の安定と統一を主張する穏健で保守的なカトリック王党派だった。この分野には、『宗教的見解の相違によって齎される人間間の争乱について *Des differens et troubles advenants entre les hommes par la diversité des opinions en la religion*<sup>16</sup>』(1562)を皮切りに、いくつかの著作がある。中で

<sup>13</sup> Citée par Becker, *ibid.*, pp. 23-24.

<sup>14</sup> Gundersheimer, *ibid.*, p. 55.

<sup>15</sup> B. L. Richter, « The Thought of Louis Le Roy according to his Early Pamphlets », *Studies in the Renaissance*, vol. 8, 1961, pp. 173-196 参照。

<sup>16</sup> Claude-Gilbert Dubois, *La conception de l'histoire en France au XVI<sup>e</sup> siècle : 1560-1610*, Paris, A. G. Nizet, 1977, pp. 54-66 参照。

も『当代のフランス及び世界の歴史に関する考察 *Consideration sur l'histoire françoise et universelle de ce temps*<sup>17</sup>』（1567）は、現実政治への関心と歴史研究との総合として、後の『変転と多様』を予告するものである。その一方で、ロベール・マコー、ジャック・アミヨによってそれぞれ部分的になされていたシチリアのディオドロスの翻訳を合冊し、自ら傍註を加えてもいる<sup>18</sup>。これも『変転の多様』の典拠の一つとして重要である。

1572年、ドゥニ・ランバン Denis Lambin の後継としてコレージュ・ロワヤルのギリシャ語教授に任ぜられる。これによって生活もようやく安定した。同年、『世界における事物の変転と多様について』を刊行する。しかし、その僅か五年後の1577年7月2日、パリにて逝去。他にラテン語の書簡集・弁論集を残している<sup>19</sup>。

## B. 『世界における事物の変転と多様について』

ル・ロワの総決算というべきこの著作は、1575年、パリのピエール・リュイリエ Pierre L'Huillier 書店から出版された。その後、1576年、77年、79年、83年、84年に版を重ね、さらに1585年にイタリア語訳（92年再版）、1594年に英語訳が出されている。後者はスペンサーやベーコンにも影響を与えたとされる<sup>20</sup>。

ル・ロワの言に従えば、この作品は「人間の記憶が始まった時代より現在までの、世界のあらゆる事物の変転について、及びその天上界・地上界に見られる主だった多様さの原因について」（p. 7）を対象とする。もともと、実際には、天上界については第一章冒頭のごく僅かな部分で論じるだけであり、それ以降の圧倒的な大部分は人間の歴史に割かれている。

全十二章の章題は、以下の通りである<sup>21</sup>。

第一章：総論（章題なし）

第二章「言語の変転と多様について」

第三章「学芸の変転と発明、またいかにして人間が原初の単純粗野から現在の快適さ、壮麗さ、卓越さに至ったか」

<sup>17</sup> *Ibid.*, pp. 79-83 参照。

<sup>18</sup> *Histoire de Diodore Sicilien*, Paris, M. Guillemot, 1585.

<sup>19</sup> ル・ロワの著作の詳細な目録は Becker, *ibid.*, Appendice II, pp. 385-390 にある。

<sup>20</sup> Gundersheimer, *ibid.*, Appendix I, pp. 133-135.

<sup>21</sup> 内容の概略を知るには、著作の冒頭に付されたル・ロワ自身による要約を見るのが簡便である。

- 第四章 「勢威と知恵を併せ持った、世界の著名な、そして全民族のうち最初かつ最古であった諸民族における、拮抗する軍事及び文芸の変転について、そしてどの民族が両者において優れていたか<sup>22</sup>」
- 第五章 「ギリシャ人における学問、詩歌、雄弁、勢威及びその他の卓越した点について」
- 第六章 「ローマ人における勢威、軍事、学問、雄弁、詩歌及びその他の卓越した点について」
- 第七章 「勢威、軍事、学問、言語、雄弁、詩歌及びその他の学芸の所産に関する、ローマ人とエジプト人、アッシリア人、ペルシヤ人、ギリシヤ人、パルタイ人の比較」
- 第八章 「アラブ人、サラセン人及びその他のイスラム諸民族における宗教、勢威、学問及びその他の卓越した点について」
- 第九章 「イスラム諸民族の宗教と勢威の続き、初期のトルコ人、コラスミア人、タタール人について、スルタン、オスマン及びスーフィーについて：ここでは大汗国、カタイ、ナルシング王国、モスクワ公国、プレートル・ジャンについても論じられるが、それは、彼らが奉じているのが別の宗教であるとはいえ、今ではその存在が紹介され、認知されているからである」
- 第十章 「当世の勢威、学問及びその他の卓越した点について」
- 第十一章 「当世と過去の輝かしい諸世紀との比較、これは当世がどの点においてそれらに勝り、劣り、あるいは等しいかを知るためになされるのであり、最初に扱うのは現代の軍事と古代ギリシヤ・ローマの軍事に関してである」
- 第十二章 「かつて言われたこと以外には何も言うことはできない、というのは本当か、また、古代人の著作の翻訳、敷衍、訂正、要約にとどまらず、自らの発明で彼らの所説を拡張するのは妥当なことか」

ここでは、各章の細部にわたって論じることはできない。以下、ル・ロワが(1)歴史に現れる人間の「多様と変転」を、どのような概念や方法を用いて理解しようとしているか、(2)その上で「当世」という時代を歴史全体の中でいかに捉え、その中で人間の役割をどのように規定しているか、という点を、章の順序に従いつつ検討していく。

---

<sup>22</sup> 世界の創世以降、インド、エチオピア、エジプト、アッシリア、カルデア、ペルシヤ、スキタイなどの古代諸民族が扱われる。

## 2. 人間の「変転と多様」：歴史をいかに理解するか

### A. 「変転と多様」

世界の、とりわけ人間に関わる事柄の「変転と多様」は、我々の眼前にある経験的事実である。『変転と多様』の第一章は、全体の総論として、その原因について考察している。

まず挙げられるのは星辰の影響である。しかしこれは、人間——個人・民族の気質から国家・文明の盛衰まで——に一定の支配力を有しているのは確かであるにしても、決して決定論的な支配ではありえない。なぜなら星辰もまた被造物であるゆえ「変転と多様」を免れず、その力は永遠不変の神の摂理と厳然と区別されるからである (p. 20 sq.)。結局、自然界と人間界の双方において「反対と不同 *contraires et dissemblances*」が原理となっているのは、窮極的には神の意志ゆえに他ならない。また、事物に即して言えば、自然界においては地域（特に緯度）の別がそれぞれに固有の動植物、鉱物、そして人間——体格・気質において、また文化・風俗において——を生む原因となる。

「変転と多様」が最も顕著なのは、何よりも人間に関する事柄である。

さて、最大の多様と変転は、他のいかなるものよりも、人間に存する。なぜなら生まれるや否や人間は死に始めるのであり、その誕生から終末が帰結するからである。幼年から老年まで彼が生きている間、彼は自分のうちに同じものを持たないし、自分自身、同じでもない。反対に、常に新しく変わっていく。身体に関しては体毛、肉、骨、血液が変化を蒙るし、精神に関しては気質、習慣、意見、欲求、快楽、苦痛、不安、希望が変化を蒙る。我々は学芸を学び、忘れ、記録する。食物を受け入れ、器官の働きによってその滓を外に出す。常に新しい食事によって空腹の辛さを解消し、呼吸によって自分を動かしながら。子供ははしゃぎ回り、老人は繰り言を言う。別の者は常に阿呆であるか、あるいは時折阿呆になる。また別の者は、不断の熱病やその他の偶発時によって憤激する。他の者は酒を飲みすぎて理性を失う。ある者たちは生まれつき馬鹿で鈍重であり、他の者はより有能で才覚があり、他の者はより賢明で良い資質を備えている。さて、彼らはみな理性的精神の分け前を持っているし、同じ材料で作られた身体を持っている。驚くべきことは、生まれた時から個人に見られ、一般的には民族に応じて見られる多様性というものがどこから生じるのか、ということである。これについて自然は面白がっているように思える。人間の窮乏を助けるため、自然は各々が、他のことよりも何か一つのことに向くように作った。文芸に、軍事に、あるいはその他の自由学芸や実用技術に。それだけでなく、人々を居住可能な地上の様々な地域に、異なった性向や気質をもって生まれさせた。(pp. 49-50)

こうした人間の「多様と変転」の理由としては、生来の体液・気質の差異、星辰の影響、プラトンの想起説などが仮説として挙げられるが、最も真実に近いのは、神がそう望んだからとする説であるとされる。神は公共の善と人間社会の維持のために様々な才能を人々に割り振ったのであるが、その人間社会というのは、様々な階級、地位、職業の別と、それら相互の扶助なしには成り立たないのである (p. 52)。

人間の「多様」に関する一つの説明としては、プトレマイオスの言うように、黄道帯および太陽との位置関係によって規定される地域や気候の影響が考えられる。過度の暑熱または寒冷に晒される赤道地帯・極地帯の諸民族が定住をせず文明を持たない一方、中緯度地帯の諸民族は生まれつき文武に優れた資質を持ち、高度な文明を形成する。このうち、赤道に近いものは憂鬱質で思索に向き、極に近いものは多血質で手工芸に向き、中間地域に住むものは二つの気質を兼備するゆえ国事に向く。西方と東方でも差異が見られ、前者は武に、後者は文に秀でる。さらに、ヨーロッパは、大帝国に支配されたアフリカやアジアに比べて多数の国家が乱立しているため、競合と緊張が生じ、優れた人材が輩出する。例えば古代ギリシャ、イタリア（ローマ）、ゴロワ、ゲルマニアなどである。ただし、敗者の記録は多くが散逸するため、後二者の偉大な事績は現代まで十分には伝わっていない<sup>23</sup>。

こうした主張自体は無論、ル・ロワの独創ではない。ボダンの如き数学的な分割を行うわけでもなく、取り上げられる事例の広範さと母国であるゴロワ（フランス）への多少の偏見を除けば、プラトン・アリストテレス以来の伝統的見解を踏襲するものである。

より重要なのは「変転」に関する議論である。そもそも人間自体のうちに「変わりやすく、安寧に甘んじられず、新奇なものを求めたがる精神」(p. 65)がある。それによって人間は居所だけではなく、習俗や言語や文芸や領地や宗教などを変えたがる。その結果、交雑が生じ、どんな場所にも一つの民族がずっと定着するということはないし、どんな民族も純血というわけにはいかない。民族が変転を免れないように、都市や国家も変転を蒙る。ル・ロワはプラトン以来頻々と繰り返された六種の政体の循環にも触れるが、これは

---

<sup>23</sup> 古代ゴール人の栄光については、フランスの悠久さと偉大さとを顕揚する立場から、当時大いに喧伝されたものである。これについては次を参照。Cl.-G. Dubois, *Celtes et Gaulois au XVI<sup>e</sup> siècle : le développement littéraire d'un mythe nationaliste*, Paris, J. Vrin, 1972.



実際には何らの包括的な説明を与えるものでもない。彼によると、こうした「変転」の原因となるのは「運命の不定」か「人間の浅慮」とされる (p. 69)。

ル・ロワに特徴的なのは、デュボワも指摘する通り<sup>24</sup>、人間の「変転」が単に政治的・軍事的な事象にはとどまらず、言語 (第二章) や学芸 (第三章) にまで及んでいることである。言語の発生から、文字の発明、書法の開発、さらには印刷術の発明や翻訳の意義についてまでを論じる第二章も興味深い。ここでは第三章を中心にすることにしたい。

プラトンの『プロタゴラス』が伝えるプロメテウスとエピメテウスの神話を踏まえつつ、ル・ロワはまず原初の人間の有様を述べる。他の動物と異なると、脆弱で身を守るすべを何も持たない人間は——これはプリニウスの描く「人間の悲惨」に倣うものである——、「万物を発明する者」である「必要」に迫られて、「手、言葉、理性 *les mains, la parole, et raison [sic]*」 (p. 103) を用いて様々なものを作り始めた。「理性は発明するため、言葉は伝達するため、手は、自分自身で理性によって発明したり他人から言葉によって教えられたりしたことを成し遂げるため」にある (*ibid.*)。まずは生きるために必要なもの、次いで快楽や装飾に供されるもの。そして文字や学芸。その延長として、宗教、さらには国家や法律をはじめ様々な社会制度も作られる<sup>25</sup>。人間は、当初は衣食住とも自然の与えるものをそのまま用いていたが、段々と柔弱になり、そうした生活に耐えられなくなる。そこから牧畜、次いで農耕が始まり、調理が行われ、集落が形成されるようになる。次第に衣食住のあらゆる面で贅沢が蓄じる。社会が複雑化し、娯楽が増え、様々な専門職が現れる<sup>26</sup>。こうして得られた閑暇と安逸の上に学芸が生まれる。アリストテレスの言うように、「知ることは人間の生得の欲求」だからである (p. 112)。

<sup>24</sup> Cl.-G. Dubois, *La conception de l'histoire, op. cit.*, p. 92.

<sup>25</sup> ボダンその他の多くの法曹家知識人たちと同様、彼は宗教の社会制度の一つとしての面を強調する。それは、エジプト、カルデア、ペルシャ、インド、古代ギリシャ・ローマ、ゴールやイスラム世界だけではなく、キリスト教国における教会についても同様である (pp. 187-191 参照)。また、立法者であり国家の創始者であるミノス、ヌマ、ゾロアスター、リュクルゴス、ヘルメス・トリスメギストス、ムハンマドらは、神の名を用いて権威を獲得したとされる (p. 341)。ただし、信仰の対象としての神それ自体については別である。実際、文字や法律や国家を持たぬ新大陸の未開人も含めたあらゆる民族が、唯一の創造主たる神についての信仰を持っている (p. 104)。また、世界の創造についても、諸民族の様々な説を検討した後、最終的には聖書の記述が正しいとしている (p. 131)。なお、政治的文書における国家と教会の関係に関するル・ロワの見解は、Becker, *ibid.*, p. 222 sq. 参照。

<sup>26</sup> こうした人間の学芸・技術の発展、社会・国家の形成に関する描写は『事物の本性について』V, 1011 sq. に似るが、ルクレティウスがその契機を自然に既にあるもの

知識の探求は、「この世界を絶えず新たなものにしていく普遍的な豊かさ」(p. 113)を持つ自然を対象とした自然哲学に始まる。次いで感覚的なものを疑う懐疑主義が生じる。その上に感覚や肉体から離れた純粹な精神の思弁が現れ、最終的には神の観想にいたる。かくして、生まれつきの知識欲と知の快樂に促されて、人間は様々な学芸・技術を発明した。各民族はそれぞれ得意な分野を持ち (pp. 115-117)、また各々、専ら思弁に携わる知識階級を有している (pp. 117-118)。

以上のように、都市や国家の「変転」が民族の混淆や覇権の移動を伴いつつも大枠においては勃興から最盛期を経て衰退、滅亡へと至る循環とされるのに対し<sup>27</sup>、学芸の「変転」は、第三章の章題にあるように、「人間が原初の単純粗野から現在の快適さ、壮麗さ、卓越さに至る」連続的な発展として理解される。ル・ロワにおける歴史の展開が、ガンデルシャイマーの言うように「直線的」かつ「円環的」なものになるのは、そのためである<sup>28</sup>。

## B. 軍事と文芸

第四章以降において諸民族の実際の歴史を論じる上でも、先に挙げた各章題に見られる通り、ル・ロワは軍事と学芸の両面を欠かさず論じている。ここで興味深いのは、一つには個人ではなく集団（民族≒国家）が記述の単位とされていること、もう一つには個別の戦争や事件以上に集団内および集団間における軍事・学芸両面の推移と発展が問題になることである。そこでは、歴史を「人生の師 *magistra vitae*」と見てそこから道徳的・政治的な指針を得ようとする古代以来の見解は背景に退き、また、諸学芸（とりわけ現代的な

---

の「発見」とするのに対し、ル・ロワは人間の自らの意志と能力による発明としての面を強調する。ただ、ルクレティウスのような例がある以上、フィリップ・ドゥザンのように、人間の自然状態から文化状態への移行を「人類学的に」考察している点にル・ロワの獨創性があるとするのは、幾分無理があるように思える (Philippe Desan, « Loys Le Roy et l'anthropologie historique », in Danièle Bohler et Catherine Magnien Simonin (dir.), *Écriture de l'histoire (XIV<sup>e</sup>-XVI<sup>e</sup> siècle) : actes du colloque du centre Montaigne, Bordeaux, 19-21 septembre 2002*, Genève, Droz, 2005, pp. 39-47)。

<sup>27</sup> それゆえ彼は、『ダニエル書』に由来する神学者たちの四つの帝国論——ル・ロワはアッシリア、ペルシャ、ギリシャ、ローマという解釈を通説とするが、異論は無数にある——のような、単線的な覇権の移動は認めない。それは、古今を通じて、四つでは到底収まらない様々な覇権国家が存在したからである。同時代に即して言えば、シナ・カタイやインド、モスクワ、エチオピアなどの強国があり、中でもトルコはかつてのローマ帝国を遙かに凌ぐ勢威を誇っている (pp. 407-410)。

<sup>28</sup> Gundersheimer, *ibid.*, p. 108.

意味での芸術や工芸)の隆盛が奢侈や風俗の弛緩の証左として否定的に扱われることもない。

こうした観点から重要になるのが、軍事と諸学芸が一斉に花開く「英雄的な時代 aages Heroïques」(p. 118)の存在である<sup>29</sup>。ル・ロワはその例として、セソストリスのエジプト、ニヌスのアッシリア、キュロスのペルシャ、アレクサンドロスのギリシャ(マケドニア)、アウグストゥスとトラヤヌスのイタリア(ローマ)、アラブ人とサラセン人の全盛期、そして長い沈滞の時代を脱した「当世」を挙げている<sup>30</sup>。

ル・ロワは、こうした特異的な時代を軸に、それぞれの地域や民族の特性を論じつつ、軍事と学芸の「変転」の様相を叙述する。例えばギリシャ人について論じた第五章は、ピュタゴラスに始まるギリシャ哲学の卓越を語るるところから始まる。他の民族にも寓話に仮託した哲学は確かにあったが、七賢人以下、錚々たる無数の哲学者を輩出したのはギリシャの大きな特徴である。オルフェウスからホメロス、ヘシオドスといった詩人たちも、宗教・哲学と切り離せない。さて、クセルクスの侵攻を退けて以降、ギリシャは富と繁栄を手に入れ、工芸や学問——雄弁(特にアテナイ)、詩歌、絵画、建築、彫刻、音楽など——は隆盛を極めた。哲学もソクラテスとともに新しい展開を迎える。かくしてギリシャは軍事・学芸の双方で頂点に達する。軍事においてはフィリッポスとアレクサンドロスが、哲学ではプラトンとアリストテレス、雄弁ではデモステネスが現れた。しかし、この偉大な時代はまた、悪行に満ちた激しい動乱の時代でもあった。輝かしい栄光の時代は、既に崩壊の萌芽をその裡に有している。

というのも、よく見られることとして、人々の判断力が優れているところでは、極めて有徳な者と悪逆な者が、非常な善事を為す者と非常な悪事を為す者とが一所に会するのである。あたかも美德と悪徳は、正反対で相容れないものであるのに、その極致は極めて近接しているかのように。そのために、一方があるところでは他方がすぐにそれに連れ添い、決して離れることがないことになる。というのも、優れた天性が正しく教育を受ければまっただき善になって大きな善

<sup>29</sup> こうした現象の生じる原因としては、単なる偶然の一致、星辰の影響、栄誉を求める人間の競争心など諸説ある。そして、こうした時代が永続的なものではありえない原因も同様である(pp. 118-120)。ただ、ル・ロワ自身の考えでは、神が、「それぞれの民族が各々、幸福と不幸の時代を経験するように、また、あまりに長い繁栄によって傲慢になるものがないように」と心を砕いて世界各地に繁栄と衰退の時代を差配しているからだ、とされる(p. 120)。

<sup>30</sup> 多少の異同はあるが pp. 70-71 にも同様の記述がある。

を施すことになるが、同様に、それは悪い育て方をされれば極悪になって大きな悪を齎すことになるのだ。なぜなら途方もない悪辣さも窮極の悪徳も、無気力で愚劣な天性からは生じず、育ちによって墮落させられた優れた天性から生じるのである。ちょうど、諸学芸が花開き優れた判断力を持つ人に富んだこの時代に、非常な動乱が見られるように。(p. 222)

かくしてギリシャには腐敗と墮落がはびこり、背信と猜疑が渦巻くことになる。フィリッポスとアレクサンドロスの偉業もまた、飽くことのない野心と表裏一体であった。ギリシャの諸都市は互いに抗争し、内部にも分裂を抱えた。それと並行して、哲学ではエピクロス、キュニコス派、キュレネイ派、エレトリア派、メガラ派、ピュロン派などの墮落した学派が続々と現れる。かくしてアレクサンドロスの死後、ギリシャは文武の栄光を失って転落し、ついに隷属の時代に突入することになる。

ギリシャの興隆と凋落の原因は、一面においてはアレクサンドロスの優れた個人的な資質に帰せられる。疑いもなく彼は類稀なる征服者であり、また学芸の庇護者でもあった。しかし、ル・ロワはさらに進んでその事実をより一般的な省察に還元しようとする。すなわち歴史の中には資質に富んだ人間を輩出する特異的な時代があり、そこでは最良の人間と最悪の人間が同時に現れるのである<sup>31</sup>。これによって軍事と文芸の双方の「変転」が齎されるのであり、偉大なアレクサンドロスの存在も、畢竟その一つの表れに過ぎないのだ。こうした考察は、後の章で「当世」の栄光と悲慘を論じる際にも大きな意味を持つことになる。

### C. 「比較」という方法、および諸学芸の起源について

各民族・各時代の特性を理解する上で、ル・ロワは様々な水準での比較を駆使している。それは時に個々の人物に、時に軍事や学芸のあり方に、時に民族性や社会制度に関わる。

例えばギリシャを論じる第五章の続きでも、ル・ロワは多くの比較を行っている。アレクサンドロスは、キュロス、アゲシラス、テミストクレス、ペリクレス、アガメムノン、ユリシーズ、ディオメデス、バッカス、ヘラクレスといった英雄や名将と比べられ、彼らの持つ多くの美点に比肩し、あるいはそれらを凌駕するとされる。その上でアレクサンドロスに固有の点として、栄誉と支配への欲望が熾烈であったこと、諸芸・学問を庇護したことが挙げられる。同様に、ギリシャの学問はエジプト、カルデア、ペルシャ、インド

<sup>31</sup> ローマに関しても、共和政末期について同様の指摘をしている (p. 274)。

のものとは比べられる。ギリシャはとりわけ哲学に優れているものの、実際には他の民族から学問や知識を学んでおり、中でもエジプトに遊学したものは極めて多い。哲学については、カルデアやバビロンやエジプトの祭司と比べて、ギリシャ人は学問を始める年齢が遅くしかもすぐに放棄してしまうために主義が一貫せず、それゆえ無数の学派が現れ、その間の争いも激しいとされる。文芸の面では、ペルシャ人やインド人が簡潔な言葉を好んで哲学や修辭学に携わらず、シリアやアラビアの遊牧民が観察に基づいた天文学を持つものの、文字を知らないために口承の父子相伝で満足しているのに対し、ギリシャ人は、アテナイで生まれデモステネスを頂点とする雄弁を有し、質量ともに他を圧する詩歌を誇り、さらにはヘロドトスやトキュディデスに見られる、雄弁と文飾に満ちた歴史書を持つ。工芸に関しては、おそらくエジプトの影響を受けて、特にスパルタとコリントスでは、手工芸に携わる階層が蔑視されている。作品自体は、高い水準に達するもののエジプトには遙かに劣るとされる。

基準が一定せず、時に恣意的にも見えるこうした比較は、各時代・各民族を論じる上で、繰り返し行われる。ル・ロワにとって、これは未知と既知とを結んで相互に意味づけ合う網の目の如きものであり、それを通じてそれぞれの時代や民族を人間の歴史全体の中に位置づけ、かつその固有性をよりよく理解することが可能になるのである。興味深いのは、ここでも学芸に関しては民族から民族、時代から時代へと移る連続的な発展が強調され、個々の学芸の分野の起源をどの時代、どの民族に負うのか、という点が大きな問題とされることである。例えばエジプト人は医学、哲学、天文学、幾何学、代数学、カルデア人は予言と占星術、ペルシャ人は自然魔術と迷信的魔術<sup>32</sup>、ギリシャ人は雄弁と文学、ローマ人は法学を生んだ、といった具合である。

「当世」を理解し記述する上でも、それまでの章で論じた他の時代や民族との「比較」は重要な方法となる。それを通じてル・ロワは、「当世」においていかに過去の学芸が甦り、新しい学芸や技術が発明されたのか、という点を問うことになる。

---

<sup>32</sup> 「自然魔術 *magie naturelle*」が自然物に固有の秘められた力を引き出すものであるのに対し、「迷信的魔術 *magie superstitieuse*」は悪霊を呼ぶものである。キリスト教世界では前者のみが許される。

### 3. 「当世」：古代の復興から真実の探求へ

#### A. 「当世」の光と影

第十章から第十二章までの最後の三章で、ル・ロワは「当世」を取り上げる。これは軍事と諸学芸が同時に絶頂に達する「英雄的な時代」の一つである。おおよそ現代人の言う「ルネサンス」の時代に重なるが、必ずしも西欧世界に限定されない。オスマン・トルコが勢威を誇り、ティムール Tamberlan がアジアを席捲する一方、西欧においては古代の文芸が復興され、かつてないほど学芸が隆盛を極めて、そうした時代全体の謂である<sup>33</sup>。

かくして我々は、こちら側の西洋世界において、二百年來、文芸の卓越を回復し、諸学芸の研究を再開した。それらが長い間、消滅したようになっていた後にてである。幾多の学究の粘り強い努力の結果、これは非常な成功を得、我々の生きる現在は過去の最も博學な時代とも比肩しうるほどである。(p. 363)

ル・ロワは同時代の卓越性の証左として、ペトラルカに始まるイタリアの人文主義者の系譜を、次いでギリシャ語の復興に関わった学者たちを引いた後、ヨーロッパのあらゆる国の將軍や戦術家、諸学派の哲學者、雄弁家、古典語および俗語の詩人、歴史家、法學者、數學者、画家、彫刻家、建築家、古典學者、翻譯家、旅行家さらには文芸の庇護者たる開明的な君主の名を挙げる。彼の観点は、現在からすれば時に陳腐にも見えるが、ペトラルカに始まるルネサンス期の全体を俯瞰し、そこに自分の生きる時代を位置づけるという点において劃期的である。その態度は概して公平であるが、最終的にはフランソワ一世以來のフランスの文芸復興の顛場に行きつく。

古代の学芸の復興に加え、「当世」に固有の様々な新しい發明もある。印刷術——これはドイツで發明されたとされているが、実際にはシナ・カタイに遙か昔からあると指摘される——は学芸の傳播を容易にしたり、羅針盤は古代の人々が知らなかった地方の發見を齎した<sup>34</sup>。火器の發明は古代以來の武器や戦術を根底から覆したが、これは「人類の益のためよりもむしろ破滅

<sup>33</sup> これらに加えて、ル・ロワは後の章で同時代のシナ・カタイの工芸の卓越性についても触れている (p. 420)。こうした全世界的な同時性が、ル・ロワの言う「英雄的な時代」の特徴である。

<sup>34</sup> 航海術の發展についてル・ロワは極めて好意的である。「我々がはっきりと言っているのは、今日では世界のすべてが明らかになり、すべての民族が知られたということだ。今やすべての人間が互いに便宜を融通しあい、それぞれの不足を補いあう。あたかも世界的な一つの同じ都市か共和国の住民であるかのよう。」 (p. 418)

のために発明されたものであり、これが出会う者を無差別に打ち砕くことで無にしてしまう、優れた美德（武勇）の敵である」（p. 377）とされる<sup>35</sup>。

しかし、他の輝かしい時代の例に漏れず、「当世」には多くの災厄もまた新たに生まれている。一つはギリシャやローマやアラビアの医家も知らなかった新しい奇怪な病、すなわち梅毒である。これは人間の淫欲に対する神の罰であると思われる。もう一つは異端の発生と内戦の勃発である。ここではヨーロッパにおけるルターの名とともに、東からオスマン・トルコを脅かしたサファヴィーの教団と王朝 Techel Cusebas Sophi が挙げられる<sup>36</sup>。これらは全世界的な現象であり、人類に対する神の怒りを示しているという訳である。

至る所で国家は苦しめられ、動揺させられ、破滅させられた。至る所で宗教は異端によってかき乱された。ヨーロッパ全土だけではなく、アジアやアフリカのどんな僻地も、そして新大陸と東西両インドの広大な地域に散らばった夥しい数の住人たちも、長く続く内外の戦争に苛まれている。そこからあらゆる物価の騰貴が起り、頻繁な飢饉とペストが生じる。我々は信じねばならない。神が人類に対して怒り、こうした災禍を世界的あるいは個別的に送りつけているのだ、と。それは我々の悪徳を正すためであり、神についてより大きな認識と敬意を我々に持たせるためでもある、と。なぜなら、いまだかつて世界にこれほどの悪意、これほどの不敬虔と不実があったことはないからである。敬神は消え果て、純朴と無垢は蔑まれ、正義の影しか残ってはいない。すべては滅茶苦茶に混乱し、何事もそれに相応しいようにはなされていない。（p. 381）

もつとも、ル・ロワは歴史を人類の絶えざる道徳的頹廃の過程と見る立場に与するわけではない。この時代の人々が神の怒りを招くほどの悪徳に塗れているのは確かにしても、過去を徒らに美化するのは老人の繰り言に過ぎないし、何よりも、墮落の後には必ず再生があるはずだからである。すなわち、「過去の歴史で見られるのは、それ以上はありえないほどにおぞましい悪徳も一時的な支配以上のことはなしえず、それはやがて嫌忌され、極めて立派な美德が後に続くということである」（p. 422）。

<sup>35</sup> 火器に対するこうした否定的見解は、アリオストからラブレー、モンリュックにいたるまで広く見られる。ただし、その動機は、兵器としての残酷さへの嫌悪という以上に、火器による「無差別」な殺傷が、美德（武勇）の発揚の場であった戦場を匿名的なものに変え、それを無意味なものとしてしまうことへの不満にあった。

<sup>36</sup> ペルシャを始めとする東方の情勢は、ヴェネチアの商人や旅行者などを通じて、不完全ながらも西欧に齎されていた。とりわけ 16 世紀初めに勃興したサファヴィー朝は、オスマン・トルコを共通の敵とする（空想上の）同盟相手として注目された。

ただ、「当世」の非常な卓越性は、その歓喜と昂揚とを感じるル・ロワに、さらなる破滅への不安を掻き立てずにはいない。過去の経験に照らして現在と未来を考えれば、軍事的・文化的な極致に達した時代はただ急激な転落と崩壊とを待つのみだからである。第十一章の最後で彼が脳裡にまざまざと思い描くのは、かつて蛮族が侵略した時と同様に、蛮族がヨーロッパに侵入して都市や城塞や宮殿や教会を破壊し、習俗や法律や言語や宗教を改変し、図書館を焼き尽くす光景である。あるいは内戦が勃発し、分派や異端が瀆神を繰り返した果てに擾乱を起こし、飢饉と疫病が猖獗を極める光景である。さらには自然の秩序が狂って各地で洪水や早暑や地震が発生し、ついには「これらのうちの何らかの無秩序によって世界は終末に向かい、それと一緒にあらゆる事物を混乱に陥れ、すべてを太古の渾沌へと導く」光景である (pp. 426-427)。これは予言であると同時に、宗教戦争と相次ぐ天災の渦中に生きるル・ロワの眼前に広がる風景でもあった。実際、彼は政治的文書の中でもこうした現実に近い憂憤を漏らしていた。破滅はほとんど不可避であるように見える。ただ、ル・ロワの抛り所となるのは、すべては自然学者の言う如き必然的な法則にではなく、自然を超越した神の摂理に懸かっている、ということだ。

だから良き意志を持った人々はこれを徒らに恐怖するのではなく、むしろ心を落ち着けて自分に与えられた天分を、心をこめて行うべきである。それは、力の及ぶ限り、再興されあるいは新しく発明された立派な事物を保存するためである。それらが失われたら、ほとんど回復は不可能だろうから。そしてまた、我々が祖先から受け取ったのと同じように、それらを後世の人々に伝えていくためである。文芸についても同様に、それが続くことを神が望み給う限り、保たれるようにしよう。神に対して我々は、それについて見事な仕事を果たした人々を、不名誉から免れるようにと祈るだろう。彼らが、神を讃え、その名誉と栄光のために行った諸学芸の改良と真実の解明というこの高潔な研究を、粘り強く続けられるように。 (pp. 427-428)

ル・ロワの宗教的信条についてここで語るのは手に余ることだが、少なくとも言えるのは、彼が神に対置された人間の能力の限界を踏まえた上で、人間の為しうること・為すべきことを示そうとしていることである。黙示録的な破滅への予感、技術や学芸の保持と発展にあくまでも尽くそうとする意志と矛盾しない。現在は暗く、未来はなお暗いが、だからといって我々は、脈々と受け継がれてきた学問の燈を絶やすわけにはいかない。神の意に叶う限り、それを守り、育み、子孫へと伝えていくのは「良き意志を持った人々」



の義務だからである。この決意の表明は、ル・ロワにとって、学問と真実への人文主義者の愛と、悲劇的な予兆に満ちた現実への関心との緊張関係を調停するものであった。

## B. 我々は何を為しうるか？ 我々は何を為すべきか？

最後に第十二章を見ることにする。この章の題を改めて引けば、「かつて言われたこと以外には何も言うことはできない、というのは本当か、また、古代人の著作の翻訳、敷衍、訂正、要約にとどまらず、自らの発明で彼らの所説を拡張するのは妥当なことか *S'il est vray ne se dire rien qui n'ait esté dict paravant, et qu'il convient augmenter par propres inventions la doctrine des Anciens, sans s'arrester seulement aux versions, expositions, corrections et abreges de leurs escrits*」というものであった。この文言は著作全体の題名の内にも含まれており<sup>37</sup>、ル・ロワにとって極めて重要な問題であったことが分かる。

この問いに対するル・ロワの答え自体は何の紛れもなく明快である。すなわち、学芸は絶えず進歩・発展していくものであり、我々は先人の糟粕を嘗めることに甘んじてはならない。章の冒頭では次のように言われる。

学芸の始まりは微小なものであり、それを最初に発明するのが最も難しい。それから学究たちの努力によって少しずつ発展されられていく。間違つて理解されていた点を直し、足りなかった点を補いながら。しかし、何も付け加えることがないような完璧さに達することはない。始まると同時に完成するものは何もないのであり、時代を経ることによって育まれ、正され、磨かれるのだ。かくして、ほとんどすべての学芸は慣習と経験によって見つけられ、それから観察と理性によって整えられる。その結果、より良い形式、すなわち分割や定義や推論や証明を用いた、また自然から引き出され、臆見から隔たり、同じ目的に向けられた普遍的な教条や法則を用いた、より確実な形式に纏められる。最初の人々が行い、言い、書いたものに留まることはないし、怠惰で無気力な心を持った者たちのようにそれらを模倣するだけということもない。そうではなくて、そこに自分自身に由来するものを付け加えていく。かくして物事は次第に現れ、明らかにされていくのであり、一般的には、最後の者が最も洗練され完成された者として、榮譽を得ることになる。(p. 429)

学問は、究極的な真実へと向かう不断の進展である。それは、幾世代にもわたる学者たちの努力によって改良されていく。古代の著作家たち自身もまた、「学問の困難さと人間の愚劣さ」(p. 430)を熟知するゆえ、すべてを言

<sup>37</sup> 註1参照。

いえたと豪語するような傲慢さを持たず、多くの不分明な点があることを率直に認めて後代に託している。天地の運行も、元素の性状も、そして人間の能力も、古代と現代には何らの違いもない。学芸の進歩は、我々が、懶惰に陥らず快樂や奢侈に溺れない固い意志を持つことに懸かっているのである。

この時代が哲学においてプラトンとアリストテレスに、医学においてヒポクラテスとガレノスに、数学においてエウクリデスとアルキメデスとプトレマイオスに比肩する優れた人物を生み出すことを妨げるものは何もない。彼らの著作の助けを得、古代が我々に示す無数の範例に従い、彼らの死後になされた無数の観察や発明、そしてあらゆる事柄に関する長い経験を手に行っているのだから。それゆえよく考えれば、現在以上に文芸の進展に好適な時代はいまだかつてなかったのである。(pp. 430-431)

従って、多くの人文主義者とは反対に、ル・ロワは先人の「模倣」に甘んじることを精神の怠惰の証として拒絶する。かくして古典古代の權威は、否定こそされないものの、極めて限定される。真実は古代の著作の中にはなく、神と自然の元にあり、それを発見するのは未来に懸かっている。というのも、「真実は、それを探し求め、それを認めることのできるすべての者に姿を現す」(p. 431)からである。デモクリトスは、真実が井戸の底のような深みに隠されていると嘆き、それを引き揚げるのは不可能と考えたとされるが、それはル・ロワにとって、不可知論の諦めではなく、不断の「真実の探究 la recherche de verité」(p. 432)を促すものなのとなる。

実際、古代の多くの優れた著作が我々に伝えられることなく湮滅し、古代のとりわけ実用的な学芸が実地には行われなくなっている一方、古代の著作にあった誤謬は改められ、さらに多くの新しいことが発見され、発明された。それにもかかわらず古代を敬慕し崇拝するあまり、現在の事柄を蔑ろにするのは本末転倒である。

古代人にかかずらうばかりで、自分の時代の風俗や出来事に相応しい新たな発明を生み出そうとしないというのは、研究と文芸とを誤って行くことになるのではないかと。我々が古代人の著作の翻訳や訂正や註釈や解説や要約しか行わないとしたら、一体いつになれば我々は雑草と麦を、花と果実を、樹皮と木材を取り違えることをやめられるだろう？ もしも古代人たちがそのように振舞ってきたのだとしたら、すなわち既に言われたり書かれたりしたこと以外には何も言ったり書いたりしようとしなかったならば、いかなる学芸も発明されなかつただろうし、最初の状態に留まって、何の成長もしなかつたことだろう。いつまでも模倣ばかりしている者、他人の影に隠れて翻訳や註釈ばかりしている

者は、まったくの奴隷であり、何の立派な点も持たず、時には自分が長いこと研究したことすら敢えて行おうとはしないのだ。彼らは自分自身を信用せず、後発の人々が同意しない事柄についても最初の者に追従する。さらにまた、いまだに探求されていない事柄は、決して見つけられることがないだろう。もし人がすでに発明されたことで満足して、何もそこに付け加えることがなかったならば。(pp. 433-434)

他人の模倣や註解に終始するものは単なる奴隷でしかない。研究と学芸に必要なのは、「自分の時代の風俗や出来事」の固有性を認め、自分の力の及ぶ限り新しい発明や発見を志すことである。これは実際に古代人たちが行ったことでもあった。敢えて進んでそれを行わないというのは、怠惰と卑屈のゆえでしかない。

既に世の中にはあまりに多くの著作があるではないか、と反駁するものもあるだろう (p. 434 sq.)。こうした批判者たちに対し、ル・ロワは次のように答える。古代以来、無数の著作があるのは確かであるが、実際のところ、そのうちの過半のものは早々に失われるか、あるいは我々にとっては無意味だったり理解不可能だったりする。それらは、あるいは著作自体の難解さや粗雑さゆえに顧みられなくなり、あるいは時代遅れのものとして見捨てられ、あるいは戦争によって、言語や宗教の盛衰によって失われ、あるいは校訂者や註釈者の無知や怠惰によって毀損される。そもそも特定の職業や宗派の成員、特定の言語の話者にしか理解できないような著作も多い。そうした中で、ただ「立派な判断と深遠な知識によって熟成され、神の特別な恩寵と自然の稀有な好意を得た」著作——プラトン、アリストテレス、ヒポクラテス、プロトレマイオスなど——だけが、忘却の淵に沈むことなくあらゆる民族・あらゆる宗派に受け入れられ、様々な言語に翻訳されて生き長らえるのである (p. 437)。

学芸、そして個々の著作の命運もまた、人間的な事柄である以上、様々な「変転」を免れない。しかし、人間が真実を希求する限り、滅びたものは新たな、より優れたものによって補われる。それは全体としては、真実へと向かう不断の、そして一貫した改良と更新の過程である。人間は(プラトンの言う通り)個人の死にも拘らず生殖によって種としての不死を得ることができるが、精神についても同様のことが成り立つわけである。世界には「永続的な事柄 choses perpetuelles」と「変容と腐敗を免れない事柄 muables et corruptibles」があり (p. 437)、人は優れた業績の齎す栄光によって前者に近付くことを望む。かくして学芸は、途切れることなく常に進歩するのである。

そして、個人の資質に優れ、国家の制度も整い、他国の学問の移植に腐心してきた現在のフランスは、今やその最先端にある (p. 440)。

『変転と多様』全体の結語は以下の通りである。

それゆえ、もしすべての人が未来は自分に懸かっていると思い、自分の記憶を後世に残そうとするならば、学者は、他の者がすぐにも滅び去ってしまうような仕事によって行おうとしているものを、文芸の堅固な記念碑によって手に入れることを怠ってはいけない。自分の力の限り勉学に励むのが相応しい。それは、恩恵を与えるものに対してしばしば忘恩を働き、目の前の美德に嫉妬を抱く人間たちのことを考えてでなくとも、少なくとも、神の栄光のためにである。神が望み給うのは、我々が学芸と学問を、その他の生活に必要なものと同じように注意深く守り、立派な事柄についての博学で優雅な著作によってそれらを後世に伝えることなのだ。すなわち、不分明なものに明瞭さを、疑わしいものに信用を、混乱したものに秩序を、粗雑なものに洗練を、雑然としたものに優雅さを、古びたものに新しさを、新しいものに権威を与えることによって。

(pp. 440-441)

学芸の進歩と洗練はかくして神に嘉せられるものとなる。それは「真実の探求」それ自体についてだけでなく、その結果を「文芸の堅固な記念碑」として残すことについても言える。そうした個人々の意志と努力の結果が、総体としての学芸の持続的な発展を保証するのである。

#### 4. 結論

ル・ロワの『変転と多様』はフランス語で書かれた最初の「歴史哲学」と言われる<sup>38</sup>。これをヴィーコやヘーゲルにおけるような意味で理解するのは困難だが、少なくとも、人間の時間的・地理的な広がり総体としての歴史を対象とし、そこから(直観的であるにせよ)何らかの意味を汲み取るものであるのは確かである。そのために彼が用いたのが、人間の歴史を軍事と文芸の双方に亘る「変転と多様」として捉える世界観であり、様々な民族や時代の「比較」を通じてそれぞれの相違を明らかにするという方法論であった。そこでは政治・軍事的な側面では無数の民族や国家が興亡を循環的に繰り返す一方、学問や技術・芸術に関しては、人類の総体として、一貫した展開が見られるとされる。ル・ロワの生きる「当世」は、軍事と文芸が揃って興隆

<sup>38</sup> Philippe Desan, « Le Roy (Loys) » in Michel Simonin (dir.), *Dictionnaire des Lettres françaises : Le XVII<sup>e</sup> siècle, « Le Pochothèque », Paris, Fayard, 2001.*

を迎える「英雄的な時代」の一つである。各国・各民族の軍事的・政治的な興隆については姑く措くとしても、とりわけ西欧世界における文芸は、古典古代の復興に加えて様々な新しい発見や発明があり、古今の頂点に位置するといつて過言ではない。その中で、学究たるものは古人の模倣に甘んじることなく、進取の気性をもって、「真実の探求」に邁進し、学芸のさらなる改良と発展に身を捧げるべきなのである。そしてそれは、神の望み給うことでもある。

こうしたル・ロワの見解は、人間の能力への信頼と、学芸の進歩への確信とに要約できる。これを「人間の尊厳」と「人間の悲惨」の弁証法の如く解するのは的外れである<sup>39</sup>。ル・ロワがとりわけ同時代に見られる「人間の悲惨」について鋭い問題意識を有していたことは疑いないにしても、全体としてはむしろ、デュボワの言うように、人間の意志と行動の可能性に全幅の信頼を寄せる、「楽観的かつ賢慮ある主意主義<sup>40</sup>」とする方が適切であろう。

ル・ロワは、一世代前に属するビュデや初期のラブレーの持つ文芸復興の歓喜や昂揚を、古代東方の諸民族から同時代のイスラム世界、新大陸、インド、極東までも含めた様々な民族・地域に関する新たな知見を交えて、さらに拡大した。そして、そこに見られる無限の「変転と多様」の中に、真実へと向かう一貫した学芸の進歩を見出した。彼は、神こそが人間的なものも含めた学芸すべてを最終的な真実へと導く指針であり保証であると確信しており、それゆえ異端や内戦、飢饉や疫病によって荒廃する世界の破滅の予感にも拘らず、人間の意志と行動による学芸のさらなる発展を決して疑うことがなかった。一世代後の、例えばモンテーニュのような著者になれば、同時代の社会の危機に対する意識がより痛切なものとなる一方、真実は信仰に関わる神の絶対的な真実のみに局限されることになる。そこでの世界の「変転と多様」は、自己の現在の意見やあり方の特殊性を暴きだし、それに固執することへの懐疑的な批判を齎すことになる。それは悲劇的な現実の状況に対する慰藉となる一方、学芸の進歩の可能性自体を根本から問い直すものとなる。それと同時に「変転と多様」は個々の人間の内面に関わるものとして再定義

<sup>39</sup> Jean-Luc Martinet, « L'excellence de l'homme dans le livre *De la vicissitude et variété des choses en l'univers* de Louis Le Roy » in Françoise Argod-Dutard (dir.), *Histoire & littérature au siècle de Montaigne : mélanges offerts à Claude-Gilbert Dubois*, Genève, Droz, 2001, pp. 301-312. この評者は、あまり明確な理由もなしに『変転と多様』をピエール・ボアイスチュオ Pierre Boaistuau の『人間の卓越と尊厳に関する小論 *Brief discours de l'excellence et dignité de l'homme*』(1558)に引きつけて解釈している。

<sup>40</sup> Cl.-G. Dubois, *La conception de l'histoire*, op. cit., p. 94.

され、モンテーニュ自身の「私」に関わる問題として焦点化されることにもなる。そこから遡って振り返れば、ル・ロワの『変転と多様』は、幾世代にもわたって人文主義者たちの行ってきた知識の時間的・空間的な拡大の、一つの集大成であったと言えるだろう。